

「靈驗龜山鉾」の八郎兵衛

大阪芸術大学 文芸学科 教授 出口 逸平

四世鶴屋南北の歌舞伎「靈驗龜山鉾」は、1822(文政五)年7月に江戸河原崎座で初演された。1701(元禄十四)年の伊勢龜山の敵討事件を基にした、「龜山もの」と呼ばれる作品群の一つである。そこには藤田水右衛門という強悪な敵役が登場する。ところが本作にはもう一人、まったく別なタイプの悪党が現れる。それが町人の八郎兵衛である。

今回は「靈驗龜山鉾」における八郎兵衛の人物像を、旧来の「お妻八郎兵衛もの」の系譜、さらには南北の先行作「彩入御伽草」(1808年初演)の八郎兵衛と比較しながら検討してみたい。

1 お妻八郎兵衛もの

「お妻八郎兵衛もの」は、1702(元禄十五)年夏に大坂で起きた無理心中事件を扱った歌舞伎「四ツ橋娘殺し」(同年秋初演)に端を発する。のち小説や歌祭文にもなったが、1764(明和元)年7月に起きた遊女殺しを描く際に、お妻八郎兵衛の名を借りて、歌舞伎「文月恨切子」(並木永輔作)が上演され大いに評判を取った。1769年には人形浄瑠璃「棲重浪花八文字」(八民平七作)が作られ、その一部は現在も「鰻谷」と呼ばれ、繰り返し上演されている。また1785(天明五)年には、江戸深川に舞台を移した歌舞伎「室町殿桜花舞台」(笠縫専助作)が生まれる。

こうして江戸・上方双方で「お妻八郎兵衛もの」の狂言が作られたが、多くの作品に共通する出来事がある。それがお妻の偽りの「縁切り」「愛想づかし」ともいうから、八郎兵衛の「殺し」にいたる展開である。

なぜお妻は嘘の愛想づかしをするのか。また八郎兵衛はなぜお妻を殺し、自害するのか。こうした謎にどう答えるかが、狂言作者各々の腕の見せ所となった。

2 彩入御伽草

南北がこの「お妻八郎兵衛もの」を初めて取り入れたのが、1808(文化五)年閏6月江戸市村座で初演された「彩入御伽草」である。その二幕目に八郎兵衛は、江戸っ子の鰻屋として登場する。お妻は元芸者で、いまは八郎兵衛の女房として店を切り盛りしている。主家の重宝鷹の掛軸を取り戻すため、言い寄る鮫鞘新助(実は八郎兵衛の弟)の甘言を入れ、お妻はわざと八郎兵衛に愛想づかしをする。激昂した八郎兵衛は、駕籠に乗った新助をお妻と勘違いして刺し殺す。その過ちを知り、心中を決意した二人だったが、鷹の掛軸が戻り、事態は一件落着となる。

この作品では、お妻の「愛想づかし」は鷹の掛軸を手に入れるための方便であり、また八郎兵衛の「殺し」には江戸っ子らしい「気短」「無法」が強調される。さらに舞台としては「これまた早替り大当り」(『歌舞伎年表』第5巻)と、八郎兵衛と新助の一人二役の早変わりが一番の見所となっている。

ただしこの二幕目は一幕目のストーリーとまったく関係がない。それゆえせつかくの一人二役も、お妻をめぐる兄弟の微妙な三角関係がうまく話の展開に生かされず、た

だ早替りという目先の変化にとどまる。また急転直下のハッピーエンドを、「江戸っ子の深切づく」の一言で納得させるのはいささか無理がある。総じてこの江戸版「お妻八郎兵衛」に趣向の面白さはあるものの、未消化・拙速の感は拭えない。

3 靈驗龜山鉾

南北は晩年にいま一度、八郎兵衛を自作に登場させた。しかし八郎兵衛は、本来「龜山もの」とはまったく縁のない人物である。あえて八郎兵衛を組み込んだ、その意図はどこにあったのだろうか。

まず人物関係でいえば、お妻の恋人は香具屋弥兵衛(実は石井源之丞)に変わり、八郎兵衛は「彩入御伽草」の鮫鞘新助と同じく、金でお妻を奪い取ろうとする恋敵となる。さらに源之丞は敵の藤田水右衛門を探しており、八郎兵衛はその水右衛門と瓜二つという設定なのである。

それでお妻は八郎兵衛を水右衛門と勘違いして接近し、弥兵衛に偽りの愛想づかしをする。八郎兵衛の嘲笑とお妻の「心変わり」に怒った弥兵衛はお妻に刃を向けるが、彼女の本心を知って和解する。ところが源之丞(=弥兵衛)は水右衛門におびき出され、返り討ちにあう。棺を前に悲嘆に暮れるお妻に、虚仮にされた隠亡八郎兵衛が襲いかかるが、逆にお妻に殺される。しかしお妻も、棺のなかに潜んでいた水右衛門になぶり殺される。

このようにみえてくると、本作の八郎兵衛には二つの特徴が見てとれる。第一は、源之丞の恋敵でありかつ敵の水右衛門と瓜二つであるがゆえに、彼は「恋」と「敵討」という本作の2つのテーマを結びつける要の役割を担っているという点である。

第二は、殺人につぐ殺人で、凄惨な場面の続く作品の流れが、彼の生み出す笑いによって切り変わる点である。たとえば水右衛門に間違われ、手紙と二十両を手に入れた彼が、「お手紙御披見のうへ、お返事を下さりませ」とせがまれ、「サア、この手紙を読たいにも、返事を書たいにも、おれは無筆○イヤサ、今日は取込んでおれば、御返事はこの方よりいたすと、親どもへよろしく申てくりやれ」と応える場面など、八郎兵衛の庶民性がコミカルに現れている。こうした笑いは「彩入御伽草」の八郎兵衛にはまったく見られない。

と同時に、「よくおれをだましたな。うぬが方から仕掛けた色事。誠と思つた八郎兵衛、俄にそれもつき出したは、扱は商売が隠亡ゆへ、われは愛想をつかしたのか」とお妻に出刃を突きつける暴力性が、八郎兵衛という男には終始つきまとっている。

こうして「靈驗龜山鉾」にいたる八郎兵衛像の変遷をみると、南北が本作の八郎兵衛を残忍でユーモラスな悪党、すなわち「悪の道化」として描こうとしたことがわかる。

ではなぜ「靈驗龜山鉾」には水右衛門と八郎兵衛という二人の悪党が必要だったのか。この点については稿を改めて論じることにした。